2024年(令和６年５月17日)

基礎講座　「冨田人形浄瑠璃鑑賞」

（冨田人形共遊団　　長浜文化芸術会館）

今回の基礎講座は、学習領域・・くらしと地域ににについて「冨田人形浄瑠璃」を鑑賞しました。

初めて、人形浄瑠璃を鑑賞する学生が殆どで、時間があっという間に過ぎてしまいました。

長浜文化芸術会館

藤田学科長・北沢副学科長
村田会計・田中副学科長

事務所の瀧口、宇野さん

開演前の様子

瀧口さんの進行

　こういう催し物は写真・動画撮影は禁止ですが、今回は我々のためにいずれもＯＫがでました。ありがとうございました。（フラッシュはダメ）

浄瑠璃の基礎の基礎を教わりました

頼政阿波の鳴門
道元寺の段

人形の仕組み
首(かしら)
人形の頭・顔を「首」と呼びます
男女、年齢、役柄、性格で分類されます
差金(さしがね)
女形の手
立役(男の役)の手
差金(さしがね)
ここを持って手を操作します
男の人形の構造
胴(どう)
肩には丸みを出すため「へちま」が縫い付けられています
足
原則として女の人形には足がありません
仕掛け糸
小猿と顔の部分をつなぐ糸です
小猿(こざる)
目・眉・口などの操作はここでします
引鋏(ひきせん)
またの名を「チョイ」これを上下させ首を上下に動かします
胴串(どぐし)
主遣いが左手でにぎります
突き上げ
男の人形についている重さを支えるための棒
足金
足遣いがここを持って足を動かします

傾城阿波の鳴門
（けいせいあわのなると）

―巡礼歌の段―

近松門左衛門作「夕霧阿波鳴門」を近松半二、竹田文吉らが改作したもの。
明和５年(1768)、大坂竹本座で初演。浄瑠璃の本場〔阿波（徳島）〕においては人形浄瑠璃といえば誰もが思い浮かべる定番中の定番です。
徳島藩のお家騒動に絡み、隠れ身となっている母〔お弓〕の元に、はるばる故郷から巡礼姿の娘〔お鶴〕が尋ねて来ますが･･･親子の再会そして別離の切ない物語です。

三業〔さんぎょう〕

人形浄瑠璃は太夫、三味線、人形遣いの「三業」で成り立つ三位一体の演芸です

太夫（たゆう）

浄瑠璃を語る太夫は舞台全体の進行役、ディレクター兼主役です。
一人で物語を語るのが基本で、受け持った場に登場する人物全ての言葉や動作、心の内、季節や情景までを義太夫節の語りで表現します。
長い作品では途中で別の太夫と交代して務め、掛け合いの場合には複数の太夫が並びます。

三味線（しゃみせん）

浄瑠璃の音楽部門は全部三味線の受け持ちです。太夫の語りを支え、物語を音でひっぱり、場面の情景や時間、登場する人形の個性や心情など、実に様々な表情の音を出します。太夫が亭主とすれば、三味線は女房役です。太夫同様、演目によっては三味線が複数並びます。
三味線には、太棹（ふとざお）、中棹、細棹の三種がありますが、人形浄瑠璃では「太棹三味線」を使っています。その名の通り棹が太く大きな三味線で、音色が幅広く、表現力が豊かです。

　僕の羽は　まだ　小さいから　青い空に浮かぶ　白い雲にのり
ヘルマン・ヘッセの詩集と　日焼け止めを持って
誰よりも先に　春の終わりの　初夏に行く
そして僕が　初夏を　独り占めする
そよ風と　懐かしい草木の匂いを感じながら　詩集を読む
ゆっくり　まったり　過ごしながら

　詩集を読み終えるころ　　初夏に　飽きるから
真夏に備えて　白いサンダルと　　黄色い麦わら帽子はどうだろか

今日は素晴らしい　五月晴れでしたね。そよ風はどこからやってくる?
青い空に　流れる雲を見つめながら　そんなことを思っていました、、、。

（T.O）